

## インタビュー

# 铸造人 i mo jin

このコーナーでは、铸造界で活躍する人々に登場してもらい、铸造とのかかわりやそのほかさまざまなお話を聞いていただきます。今月は铸造の街、岩手県水沢地区で17世紀から铸造を作り続けている(株)及精铸造所の13代目社長、及川敬一さんをご登場いただきました。

インタビュア：岩手大学 平塚貞人  
事務局 鈴木理恵

**Q** 及川さんは代々の家業が铸造業ということで、子どもの頃から铸造には親しんでこられたのですね。

**A** そうですね、私で13代目になります。でも子どもの頃から将来は家を継ぐと思われているのも嫌なものですよ。家族や友人は何も言わないのですが、直接関係のない周りの大人がやいのやいの言われ続けます。こっちの方言で“ひづる”と言うのですが、自転車に乗っていても遊んでいても冷やかされると、子供心に傷つきます。だから「家を継ぎたくない」と言い出す人が出てくるのも不思議じゃないと思いますね。そういう文化が事業継承の妨げになっているんじゃないでしょうか。

現会長の私の父は、若い頃に音楽をやっていて、プロの演奏家になろうと九州にいたところを首根っこをつかまれて水沢に戻されたそうです。私はというと、子どもの頃からスキーに夢中で、将来はプロスキーになりたいなどと思ったりしていました。でも大学に入るのに浪人して親に苦労をかけたこともあって、あまりわがままは言わずに今に至ります(笑)。

**Q** 大学卒業後はまず山形の会社で勉強なさったということですが、



●氏名：及川敬一さん（46歳）

●出身地：岩手県

●略歴：1998年3月、東京経済大学経済学部経営学科卒業。同4月、エムテックス・マツムラ株式会社入社。2000年3月同社退社、同4月(株)及精铸造所入社。2015年4月より代表取締役社長、現在に至る。2009年3月、岩手大学大学院金型・铸造工学専攻修了

**A** 私は大学は経済学部で铸造とは全然関係ないことを学んでいましたから、技術的なことなどは全くわかりません。そこで、山形の金型装置メーカーで働きながらいろいろと学ぶことになったんです。この会社の常務が父と懇意で、効率よくいろいろなことを学べるようにと取り計らってくれました。外にも連れて行ってもらい、加工や塗装、板金などの会社を見ることができ、知識もついて、今も役に立っています。

それでも最初は大変でした。まず、山形弁がわからないんですよ(笑)。課長など、岩手から来た若いのをちょっと鍛えてやるかという思いもあったのでしょうか、方言まる出しなんです。何かを指示しているようなのですが、何を言われているのかわからなくて参ったなと(笑)。それでもなんとかしなくちゃいけない。そこで思いついたのが農家でした。山形はさくらんぼの一大産地で、春の収穫時期には人手が必要になります。現地で知り合った大きな農家さんのところに週末ごとに通い、収穫を手伝いながら、現地のおばあたちの会話を聞いて山形弁を覚えることにしました。方言のきついおばあたちの会話が分かるようになったら工場の山形弁などわけないだろうと思ったんです。おかげでどんどん覚え、課長の指示も分かるようになりました。このときの課長には、少しずつでも積みかさねることで大きな自信につながるのだという仕事への姿勢を教えてもらい、それは今も教訓にしていて、とても感謝しています。そんな経験があるので、私は今でも山形が大好きなんですよ(笑)。



**Q** 2007年からは岩手大学大学院に通ったとのことですが、仕事をしながらだったのですか。

**A** 大学院に通う前なんですが、仕事がとにかく忙しい時期がありました。仕事はたくさんあるのに設備が古くて稼働率が悪かったり、品質が思うように良くならなかったりして納期に間に合わず、電話が鳴りっぱなしという状態。私はずっと現場にいていつもピリピリしていました。でも、そういう時に事故は起こるんですね。腕を失いかけるほどの大けがをしてしまったんです。治るまで3年を要しました。その間、会社に行ってもろくに仕事ができません。そこで、社会人学生を募集していた岩手大学の修士課程でお世話になることになったんです。実はそれまであまり大学との付き合いというはありませんでした。父も古い人間ですし、我々程度の小さい企業にとっては大学などというところは別世界で、自分たちの仕事に役立つようなことはないと思っていたんですね。でも、実際に大学で学んでみると、そんなことはありませんでした。大学はしっかりした人材育成をしていて、積極的に付き合った方が自分たちのためになる、というように見方が変わりました。今も大学の先生にはいつもお世話になっていますし、学会活動にも積極的に参加するようになりました。中でも私が特に衝撃を受けたのは吉見登司一先生の実践品質管理講座で、「不良の発生の瞬間をとらえなさい」なんておっしゃるんですよ。鋳造で不良の瞬間を押さえるなんてそんな無茶なと最初は思いました。実際、2回目から受講しない人も多かったです。でもじっくり聞いてみると、先生のおっしゃっていることがだんだん理解できるようになってきました。少しずつ社内で実践していく、10年以上かけて、溶湯管理や砂の管理に対しての皆の見方が変わってきていると感じます。吉見先生が言うには、社内にそういう文化を作ることが大切なそうです。ものの見方を変えることで、人も会社も成長できるんだなと思いました。



**Q** 及川さんは5年前に社長になられましたが、若くして社長に就任されたのですね。

**A** 父と一緒に会社を支えていた叔父が癌を患って余命宣告を受けたのをきっかけに、少し早めに社長になりました。でも、若い方がいいと思うんですよ。20代はとにかく一生懸命ですが、30代くらいになると会社のいろいろなことが分かってくる。そして40代になれば会社の進め方が見えてくると思うのです。でもこれから50代になるとだんだん体力が衰えて無理がきかなくなってきて、60代へ向けてまとめの時期に入ると思います。私は今年47歳になりますが、60歳まであと13年、13年間で何ができるかと考え始めています。でも、あれもこれもと欲張って焦る必要はない、正しいことを続けていれば必ず人が寄ってきます。人が寄ってくれれば企業は存続できます。逆に、できもしないのに無理をすればまた腕を折ります(笑)。だからこれからも私にできることをこつこつ積み上げて、会社を成長させていきたいと思っています。



## 及川さんに5つの質問！

- 1. 鋳造の仕事で一番楽しいときは？**  
わからなかったことが、発生の原因含めてわかり、解決できる達成感を得たとき
- 2. 趣味は？**  
わかさぎ釣り
- 3. 特技は？**  
知らない土地での食めぐり
- 4. 現職以外で就いてみたい職業は？**  
旅人
- 5. 最近気になったニュースは？**  
高校時代ラグビー部だったので、ラグビー ワールドカップの日本代表の活躍に熱くなりました